

琉球文学研究約一二三〇年。琉球文学のテキストを初めて集大成。

琉球文学大系

全
35
巻

編纂

名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会

監修 波照間永吉（名桜大学研究所特任教授）

2023年度

（おもろさうし上・下）

第51回 伊波普猷賞受賞

ゆまに書房創業五〇周年記念出版

名桜大学創立二五周年、公立大学法人化一〇周年記念事業

本書を推薦します

◎ 青い海いろの「うちなーぐち」

中西進

国際日本文化研究センター
名誉教授

沖縄（琉球）に関する書物は、日本各地の地方誌の中では、おそらく最多かもしれない。ところが、研究書は多くとも原典として知られる書物は意外に少ない。『おもろさうし』とか『琉球国由来記』とかと。これでは真の琉球文学には、なかなか手が届かない。

そうした現状の中で、今回、全三十五巻を占める『琉球文学大系』が編集刊行される。編集委員長は琉球文学研究の第一人者・波照間永吉博士、名桜大学を基盤とし、ゆまに書房が刊行を担当して二〇三〇年度までに及ぶ壮举だ。しかも一般の人にもわかりやすく、注釈や解説をつけるという。正直いって、わたしも沖縄口（ぐち）をずっと理解することは難しい。これでこそ圧倒的に多くの人が、琉球の人びとの「うちなーぐち」を心に響かせるようになるだろう。

沖縄の「うちなーぐち」が語る世界を、あの群青の海に包まれた聖なる風土への賛歌だと、わたしは考える。口にするこぼの音色もすべて群青色だ。しかも平板に会話したり、散文を綴ったりしても、ことばはすべて、歌っているように響く。この群青色の波のことばを「うちなーぐち」とよぶのだと、わたしには思えてならない。

『琉球文学大系』全三十五巻は、この青い海いろのことばの全容を示すはずである。

◎ 『琉球文学大系』の開始

藤井貞和

詩人
東京大学名誉教授

名桜大学の刊行事業『琉球文学大系』全三十五巻がいよいよ始まる。文学の領域で、歌謡、琉歌、組踊、琉狂言、演劇（台本）、説話、和文学、漢文学という二十七巻。歴史の領域で、『球陽』以下の四巻。民俗・地誌の領域で、『琉球国由来記』以下の四巻。これから十二年間をかけて、だれもが勉強しやすく、興味や関心を掘り起こすテキスト作りが、波照間永吉さん（大著『南島祭祀歌謡の研究』の著者の総指揮のもと、繰り上げられるという。私どもには懐かしい名前が並ぶ。

一九九二年に、関根賢司さんは「琉球古典文学大系全一〇〇巻、または六〇巻、少なくとも三十六巻という企画を構想しなければならぬ」と言っていた。その氏が一方で「幻の企画」とも言い、その実現を「ほとんど絶望的だ」とも書いた。しかし、『沖縄文学全集』（国書刊行会）が、その九〇年代に、近・現代の沖縄文学を彩る壮大な試みとして立ち上げられ、このたびの『琉球文学大系』という古典の集大成は、それとどこかで向き合うような気がする。幻でなく、絶望的でもなく、沖縄の現実としていま、進みつつあるのだ。

『琉球文学大系』の企画の重要なモチーフに言語という視野がある。うちなー口（沖縄方言）がどんどん失われるかもしれない現在やこれからに対する、沖縄県人の必要な自覚や見直しと、古典文学をこうして訳注や語釈を含みきちんとしたテキスト化で学ぶことは、双方向的にかかわりあうということだろう。県外の人々や沖縄の隣人たちにとっても学ぶ意義は果てしなく大きい。

◎ 琉球文学分野が

主導する事業の意義

高良倉吉

琉球大学名誉教授
琉球史

現今の琉球史や沖縄考古学の分野は専門化や個別化が著しく進展したために、伊波普猷の『古琉球の政治』（一九二三年）が描く包括的イメージを必要としなくなったのかもしれない。学問の発展から見れば、当然のことだと思う。

しかしながら、沖縄研究の現段階においても、「古琉球」像を包括的に述べたいという思念の必要性が無意味になったのではなく、個々の認識を、絶えず全体像に投射する営みを私たちは背負わなければならない、と思う。その際に、琉球文学の分野から発し続けられてきた成果と、個別分野の研究を絶えず交差させることが求められる。琉球文学の成果を内包しつつ、琉球・沖縄像の構築という共通の課題に向き合う姿勢が必要だと思う。

名桜大学が主導する『琉球文学大系』刊行事業の企画趣旨を読んだ時、琉球文学研究の豊富な蓄積をふまえつつ、歴史や民俗・地誌を含む他分野の叙述世界も取り込みながら、後世に伝える良質な総合的テキストを構築しようとの意欲が伝わってきた。

琉球文学分野が、琉球・沖縄像の形成を目指す個々の学問分野をつなぐという企てに、深い意義があることを確認したい。

◎ 千年後も継承される

テキスト資料

佐藤優

作家・名桜大学客員教授
元外務省主任分析官

言語は民族のアイデンティティーに直結する。沖縄人のアイデンティティーを確認し、継承、発展させるために琉球文学のテキスト資料を集成することが以前から待ち望まれていた。過去にこのような企画が何度か立てられたが、途中で頓挫してしまった。琉球語をネイティブとして自由に操る人が高齢化している状況で、『琉球文学大系』（全三十五巻）を刊行することは、まさに時機に合ったプロジェクトだ。現実的に考えた場合、これが最後のチャンスと思う。

「文学」「歴史」「民俗・地誌」の三領域で琉球語のテキストを残しておけば、それは数百年、千年後も継承される。沖縄は、過去も現在も未来も沖縄人のものである。沖縄の歴史は、沖縄人が形成していく。そのための基礎になるのが、多様性を持つ沖縄文化だ。琉球語は沖縄文化の要であろう。われわれの祖先が残したテキストを保全し、現在の沖縄人が理解できるような形でまとめることが死活的に重要だ。『琉球文学大系』を一人でも多くの人の手にとってもらうことが、沖縄人のアイデンティティーの強化につながる。

沖縄の外部の人々が、沖縄人の内在的論理を知るためにも、この大系を読むことが有益である。

ゆまに書房

電子書籍 同時刊行予定

価格等は、KinoDen／Maruzen eBook Library／EBSCO eBooks／日本電子図書館サービスほか各サービスにお問い合わせ下さい。

▶ 刊行にあたって ▶

波照間 永吉

『琉球文学大系』編集刊行委員会委員長

琉球文学研究が始まって約一二〇年が経つ。この間、伊波普猷・仲原善忠・外間守善・池宮正治など多くの研究者がこの未開の大地を耕して豊饒の沃野とし、さまざまな成果物を世に送ってきた。しかし、まだこの領域のテキストを体系的に整理し、研究者はじめ多くの人々に提供する仕事は成されていない。

『おもろさうし』や琉球歌謡のテキストについては、評価すべき仕事はなされているが、琉歌・組踊はじめ説話、沖縄芝居、琉球和文学・琉球漢文学、そして文学を支える歴史・民俗などの基礎資料を含めた、琉球文学を一望するテキストの制作がなされなくてはならない。琉球文学研究、そして琉球・沖縄文化研究の拡大と深化のために、研究水準を保ったテキストの整備が必要である。『琉球文学大系』を構想する所以である。

今回、名桜大学が『琉球文学大系』を構想し、その実現に向けて確たる一歩を踏み出したことは、琉球文学研究史にとどまらず、ひろく琉球・沖縄文化研究の世界で特筆されることである。文学領域を主要な部分とするが、文学と表裏をなす歴史・民俗などの領域についてもその必須文献を収録することとしている。これを整備し公刊することによって、琉球・沖縄文化研究は大きく裾野を広げることができるにちがいない。その概要は、全三十五巻。文学領域二十七巻、歴史領域四巻、民俗・地誌領域四巻である。これまでの研究の粋をあつめ、信頼される本文を構築し、細密な語注を施し、全巻に解説を付す。そして、現代語訳の必要な文献については可能な限り訳文も付けていく予定である。

この事業の完成によって、ユネスコが「消滅の危機に瀕した言語」とした琉球語の表現の豊かさ・多様性が多くの人々に共有されることになるだろう。未来につながる琉球語へ永遠の生命を吹きこむ仕事になるにちがいない。

一九九二年、関根賢司氏は「アンソロジー〈琉球弧の文学〉の構想」（『省察』第四号）の中で「琉球文学古典大系（あるいは全集、あるいは集成）、全一〇〇巻（あるいは全六〇巻、少なくとも三十六巻）」という企画を構想しなければならない」と書いた。我々の構想の魁であることを記しておきたい。一方、氏はこれを「幻の」とし、その実現は「ほとんど絶望的だ」とも書いた。しかし、今、氏が負の要素として挙げた研究者の協力態勢は整い、そして編集・刊行の経済的問題も、山里勝己前学長の思想と沖縄への篤い思いに導かれて、名桜大学が本事業を地域文化への貢献事業と位置づけることによって、道が開けた。幻ではなくったのである。十年・十二年という時間は『琉球文学大系』の完成のためにはむしろ短い。世紀の大事業の完成に向けて心して歩んで行きたいと思っている。

ゆまに書房創業五〇周年記念出版。

名桜大学創立二五周年、公立大学法人化一〇周年記念事業。



【名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会】

◆名誉委員長

山里 勝己

前・名桜大学学長

◆委員長

波照間 永吉

名桜大学研究所特任教授

◆副委員長

照屋 理

名桜大学教授

◆委員

嘉納 英明

名桜大学教授

小嶋 洋輔

名桜大学教授

平良 徹也

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員

上原 孝三

法政大学沖縄文化研究所地方研究員

◆編集アドバイザー

小林 基裕

瑞木書房代表

小番 達

名桜大学教授

屋良 健一郎

名桜大学教授

渡具 知伸

編集刊行事務局長

琉球諸語による

琉球文学テキスト編さん事業

——公立大学の役割について

公立大学としての役割とは何かを問われると、「公共上の見地から確実に実施されることが必要な事業」という法の精神に行きつく。

一九九四年に名桜大学は沖縄本島の北部地域を指すヤンバルという地に私立大学で創立され、二〇一〇年公立大学としてさらなる歩みを始めた。『琉球文学大系』編集刊行事業は二〇一九年四月の大学院博士後期課程開設に伴いスタートした。その英断は、当時の比嘉良雄理事長、山里勝己学長によってなされ、本事業は「沖縄県の高専教育機関が果たすべき役割」として理事会に提起され、全会一致により承認された。この事業の遂行は、本学が公立大学としての存在価値を決定づける壮挙につながったと言える。

これまで「琉球諸語の文化と未来」については、その保存と活用が憂慮されていた。二〇〇九年に発表されたユネスコの「消滅危機言語」に琉球諸語が含まれていることを踏まえると、本学がスタートさせた全三十五巻十二年にわたる事業は「公共上の見地から確実に実施されることが必要な事業」に符合する。その重要な役割を名桜大学が担ったという意義は極めて大きい。

この事業は、琉球諸語による初の琉球文学テキスト編さん事業となることから、将来的には国の内外はもとよりアジア・ヨーロッパを含めた海外から研究者が沖縄に参集し、沖縄文化研究の活性化につながる。また地域創生の事業としても位置づけられる。

名桜大学は小さな公立大学である。しかし、本事業は本学がエンジンとなり沖縄県の国公私立大学（三十余名の校注者）等との連携を図りながら、推進している。また、産学連携事業として、『琉球文学大系』産学連携長期プロジェクト事業調印式（二〇二二年十一月二十六日）を本学にて執り行った。その産学連携の趣旨に応えて協働事業者となってくださったのが、ゆまに書房である。同社はこの文化事業の意義を認識し、産学連携による社会貢献の意義を認め、本事業に取り組んでくださることになった。ゆまに書房には深く感謝を申し上げる。

読者にとって『琉球文学大系』は、沖縄人のアイデンティリーの源泉へと導く道標となるであろう。研究者にとっては、これから先、明らかにされる新知見を積み上げていく土台となるであろう。本刊行事業を率いた波照間永吉先生は、『琉球文学大系』が百年も二百年先も輝きを放ち続けるのは悲しい、五十年ほどであれば良いかな、と云う。この言葉には、琉球文学研究の継承への思いが現れていて、研究者の一人として共鳴させられた。

琉球文学大系 全35巻

編纂＝名桜大学『琉球文学大系』編集刊行員会



●全35巻揃定価：本体二七、〇〇〇円＋税

（各巻定価：本体六、一〇〇円＋税）

ISBN978-4-8433-6238-9 C3391

A5判上製・本クロス装・貼函入／平均六〇〇頁
「本文組」三段組Ⅱ頭注7ポ・本文9.5ポ・訳文8.5ポ
月報付 造本・装幀Ⅱ倉本 修

【第二二回配本】 2026年12月刊行予定

第22巻Ⅱ琉球説話 3 和文説話

ISBN978-4-8433-6260-0 C3391

【第二三回配本】 2026年3月刊行予定

第8巻Ⅱ琉球歌謡 ―― 宮古篇下

ISBN978-4-8433-6246-4 C3391

【第二四回配本】 2026年6月刊行予定

第3巻Ⅱ琉球歌謡 ―― 沖縄篇上

ISBN978-4-8433-6241-9 C3391

【第二五回配本】 2026年10月刊行予定

第17巻Ⅱ琉球演劇上

ISBN978-4-8433-6255-6 C3391

【第二六回配本】 2027年2月刊行予定

第16巻Ⅱ琉球狂言

ISBN978-4-8433-6254-9 C3391

【第二七回配本】 2027年6月刊行予定

第26巻Ⅱ琉球漢文学 上 漢詩

ISBN978-4-8433-6264-8 C3391

※以降の配本予定に付きましては中面の「全35巻の構成」をご覧ください。配本及び巻構成は、予告無く変更される場合があります。

【発売中】

1 ●おもろさうし 上 2 ●おもろさうし 下 11 ●琉歌 上 12 ●琉歌 中

14 ●組踊 上 15 ●組踊 下 19 ●混効験集・南島八重垣

24 ●琉球和文学 上 28 ●琉球史関係史料 1 29 ●琉球史関係史料 2

35 ●琉球民俗関係資料 4

全巻定期購読受付中

『琉球文学大系 全35巻』の定期購読を受付中。各配本毎にお届けいたします。

ゆまに書房

<https://www.yumani.co.jp/> e-mail el@yumani.co.jp

〒一〇一〇〇四七 東京都千代田区内神田二一七一六

電話〇三二五二九六―〇四九一 FAX〇三二五二九六―〇四九二

申 込 書

*ご注文は書店を通じてお届けいたします。最寄りの書店へお申し込み下さい。

◆琉球文学大系[全35巻](ゆまに書房刊)を _____ セット申し込みます。 【取扱書店名】

◆第 _____ 巻を _____ 部申し込みます。

◆ご氏名 _____ ◆電話 _____

◆ご住所 _____ 〒 _____ 25.10/01.3500.RS

▼全35巻完結年度変更のお知らせ▲本大系は、一〇一三年度から年度四冊の刊行計画で七年間での完結を予定いたしておりましたが、諸般の事情により、一〇一六年度より年度三冊の刊行計画に変更いたしました。これに伴いまして、全35巻完結年度が、当初予定の一〇三〇年度よりおよそ三年延長の一〇三四年度（八月）に変更となりました。ここに謹んでお知らせいたしますと共にお詫び申し上げます。

監修・波照間永吉（名桜大学特任教授）

●第1巻 おもろさうし 上 第51回 伊波普猷賞受賞
発売中（2022年3月刊）ISBN978-4-8433-6239-6
【校注】波照間永吉【収録】『おもろさうし』一～十巻。

●第2巻 おもろさうし 下 第51回 伊波普猷賞受賞
発売中（2022年3月刊）ISBN978-4-8433-6240-2
【校注】波照間永吉【収録】『おもろさうし』十一～二十一巻。

●第3巻 琉球歌謡 ― 沖繩篇 上
2026年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6241-9
【校注】波照間永吉・照屋理（名桜大学教授・平良徹也（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）【収録】『仲里間切旧記』、『君南風由来并位階且公事』、『女官御双紙』、『ゝゑな集』、『諸間切のろくもゝのおもり』等。

●第4巻 琉球歌謡 ― 沖繩篇 下
2030年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6242-6
【校注】波照間永吉・照屋理・平良徹也【収録】『CD沖縄の古謡（沖縄）』、『沖縄の神歌』、市町村史収録神歌等。

●第5巻 琉球歌謡 ― 奄美篇 上
2031年10月刊行予定 ISBN978-4-8433-6243-3
【校注】先田光演（えらぶ郷土研究会会長）・高橋一郎（奄美文化研究家）・波照間永吉・照屋理【収録】オモリクチタハヴェなど祭祀歌謡。

●第6巻 琉球歌謡 ― 奄美篇 下
2028年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6244-0
【校注】町健次郎（鹿児島県大島郡瀬戸内町教育委員会）・里朋樹（同上教育委員会・奄美島唄唄者・波照間永吉・照屋理【収録】奄美八月踊り歌・島唄等。

●第7巻 琉球歌謡 ― 宮古篇 上 神歌
2028年10月刊行予定 ISBN978-4-8433-6245-7
【校注】本永清（民俗学研究者・波照間永吉【収録】本永清採録宮古諸島神歌、『沖縄の神歌（宮古諸島）』、『宮古島の歌』、『宮古島旧記』等。

●第8巻 琉球歌謡 ― 宮古篇 下 民謡
2029年3月刊行予定 ISBN978-4-8433-6246-4
【校注】上原孝二（法政大学沖縄文化研究所地方研究員）・波照間永吉【収録】『CD沖縄の古謡（宮古諸島）』、『平良市史（歌謡篇）』、『城辺町史（歌謡篇）』等。

●第9巻 琉球歌謡 ― 八重山篇 上
2032年2月刊行予定 ISBN978-4-8433-6247-1
【校注】波照間永吉【収録】『沖縄の神歌（八重山諸島）』、『小浜島の芸能』等。

●第10巻 琉球歌謡 ― 八重山篇 下
2022年10月刊行予定 ISBN978-4-8433-6248-8
【校注】波照間永吉【収録】『CD沖縄の古謡（八重山諸島）』、『八重山歌節組』等。

●第11巻 琉歌 上
発売中（2022年12月刊）ISBN978-4-8433-6249-5
【校注】波照間永吉・平良徹也・照屋理【収録】『琉歌百控』、『琉歌集 春の部』、『山城正楽 琉歌集』。

●第12巻 琉歌 中
発売中（2024年1月刊）ISBN978-4-8433-6250-1
【校注】前城淳子（琉球大学准教授・平良徹也・照屋理・波照間永吉【収録】『南苑八景』、『琉歌会例題集』、『作者別琉歌集』。

●第13巻 琉歌 下
2022年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6251-8
【校注】波照間永吉・平良徹也・照屋理【収録】『古今琉歌集』、『疱瘡歌集』、『つらね集』、『口説集』、『念仏歌謡集』等。

●第14巻 組 踊 上

発売中（2022年6月刊）ISBN978-4-8433-6252-5
【校注】波照間永吉・鈴木耕太（沖縄県立芸術大学准教授・西岡敏（沖縄国際大学教授・大城學・岐阜女子大学教授）【収録】『尚家本組踊集』、『校註 琉球戯曲集』。

●第15巻 組 踊 下
発売中（2024年3月刊）ISBN978-4-8433-6253-2
【校注】波照間永吉・鈴木耕太・照屋理・西岡敏【収録】『今帰仁御殿本組踊集』、『恩河本小禄御殿本組踊集』、その他の伝本。

●第16巻 琉狂言
2027年2月刊行予定 ISBN978-4-8433-6254-9
【校注】波照間永吉・飯田泰彦（竹富町教育委員会）【収録】『桃原全能琉狂言集』、『宮良殿内本琉狂言集』、『黒島家本琉狂言集』、八重山シイマキョングン等。

●第17巻 琉球演劇 上
2026年10月刊行予定 ISBN978-4-8433-6255-6
【校注】波照間永吉・西岡敏・大嶺可代（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）・照屋理【収録】歌劇『泊阿嘉』、『奥山の牡丹』、『伊江島ハンドー小』、『葉師堂』等。

●第18巻 琉球演劇 下
2031年2月刊行予定 ISBN978-4-8433-6256-3
【校注】波照間永吉・西岡敏・大嶺可代・照屋理【収録】方言セリフ劇『真玉橋の由来記』、『ちやー木の精』、『月城物語』、『豊年』等。

●第19巻 混効験集・南島八重垣
発売中（2025年3月刊）ISBN978-4-8433-6257-0
【校注】波照間永吉・松永明（駒場東邦高等学校教諭）【収録】『混効験集』、『南島八重垣』。

●第20巻 琉球説話 1 口承説話 上
2026年2月刊行予定 ISBN978-4-8433-6258-7
【校注】山里純一（琉球大学名誉教授）・波照間永吉・西岡敏・照屋理【収録】沖縄諸島口承説話。

●第21巻 琉球説話 2 口承説話 下
2023年2月刊行予定 ISBN978-4-8433-6259-4
【校注】山里純一・波照間永吉・西岡敏・照屋理【収録】宮古・八重山・奄美口承説話。

●第22巻 琉球説話 3 和文説話
2029年12月刊行予定 ISBN978-4-8433-6260-0
【校注】波照間永吉・山里純一・宮川耕次（宮古郷土史研究会）【収録】『佐銘川大主由来記』、『宮古島記事』、『毛氏先祖由来伝』、『夏姓大宗由来記』、『琉球国由来記』等。

●第23巻 琉球説話 4 漢文説話
2028年2月刊行予定 ISBN978-4-8433-6261-7
【校注】山里純一・波照間永吉・前堂颯世（琉球大学准教授）【収録】『遺老説伝』、家譜等の漢文資料中の説話記事等。

●第24巻 琉球和文学 上
擬古文物語・紀行文他
発売中（2024年6月刊）ISBN978-4-8433-6262-4
【校注】玉那覇峻（沖縄県立開邦高等学校教諭）・大胡太郎（琉球大学教授・小番達（名桜大学教授・照屋理・屋良健一郎（名桜大学教授・波照間永吉【収録】『若草物語』、『苔のした』、『貧家記』、『万歳』、『思出草』、『配流日記』。

●第25巻 琉球和文学 下 和歌
2030年2月刊行予定 ISBN978-4-8433-6263-1
【校注】屋良健一郎・鋤武彦（志學館大学准教授）・大胡太郎・小番達・前城淳子【収録】『沖縄集』、『松風集』等。

●第26巻 琉球漢文学 上 漢詩

2027年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6264-8
【校注】上里賢一（琉球大学名誉教授・平良妙子（琉球大学准教授）・李・舒陵（琉球大学ほか兼任講師）・前堂颯世・大城志織（琉球大学大学院人文社会科学学研究所）【収録】『閩山遊草』、『四知堂詩稿』、『雪堂燕遊草』等。

●第27巻 琉球漢文学 下 漢文
2029年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6265-5
【校注】上里賢一・波照間永吉・李・舒陵・前堂颯世【収録】『琉球国碑文記』、『演戯故事』、蔡温・程順則らの漢文、代表的漢文家譜等。

●第28巻 琉球史関係史料 1 『球陽』 上
発売中（2023年6月刊）ISBN978-4-8433-6266-2
【校注】田名真之（元 沖縄県立博物館・美術館館長・麻生伸一（琉球大学教授・山田浩世（沖縄県立芸術大学准教授）・比嘉吉志（沖縄キリスト教学院大学准教授）・漢那敬子（沖縄県教育庁文化財課史料編集班専門員）波照間永吉【収録】『球陽』巻一～巻十七。

●第29巻 琉球史関係史料 2 『球陽』 下
発売中（2024年11月刊）ISBN978-4-8433-6267-9
【校注】田名真之・麻生伸一・山田浩世・比嘉吉志・漢那敬子・波照間永吉【収録】『球陽』巻十八～二十二、附巻一～四。

●第30巻 琉球史関係史料 3
『中山世鑑』『中山世譜』
2030年10月刊行予定 ISBN978-4-8433-6268-6
【校注】赤嶺守（琉球大学名誉教授・豊見山和行（琉球大学名誉教授・麻生伸一・屋良健一郎・波照間永吉【収録】『中山世鑑』、『中山世譜』。

●第31巻 琉球史関係史料 4
『伊江朝睦日々記』
2027年10月刊行予定 ISBN978-4-8433-6269-3
【校注】豊見山和行・麻生伸一・屋良健一郎・波照間永吉【収録】『伊江朝睦日々記』。

●第32巻 琉球民俗関係資料 1
『琉球国由来記』
2023年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6270-9
【校注】波照間永吉・赤嶺政信（琉球大学名誉教授）・照屋理・知名定寛（神戸女子大学名誉教授）【収録】『琉球国由来記』。

●第33巻 琉球民俗関係資料 2
『琉球国旧記』『古事集』
2026年10月刊行予定 ISBN978-4-8433-6271-6
【校注】波照間永吉・前堂颯世・照屋理【収録】『琉球国旧記』、『古事集』。

●第34巻 琉球民俗関係資料 3
神女関係資料・間切旧記等
2031年6月刊行予定 ISBN978-4-8433-6272-3
【校注】波照間永吉・赤嶺政信・照屋理【収録】『女官御双紙』、『聞得大君御新下日記』、『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』、『稲之「祭公事」（鎌倉～）』、『君南風由来并位階且公事』、『よきやのろへもい伝来記』、『天孫氏拝所書記帖』等。

●第35巻 琉球民俗関係資料 4
『四本堂家礼』『御嶽由来記』等
発売中（2023年11月刊）ISBN978-4-8433-6273-0
【校注】山里純一・赤嶺政信・上原孝二・平良勝保・波照間永吉【収録】『四本堂家礼』、『御嶽由来記』、『雍正旧記』、『宮古島記事仕次』。

第一線で活躍する気鋭の琉球文学研究者、総勢30余名による最新の研究成果を結集。初公刊の文献も多数収録!!

● 本書の特色 ●

信頼されるテキストを初めて体系化

琉球文学研究約130年の歴史の中で待ち望まれてきた、琉球諸語による琉球文学本文、初の大系化。テキスト本文は、第一線の研究者による、底本と諸本との厳密な校合により構築され、校異は頭注もしくは巻末語注に掲げ、大意・解説を明記。必要に応じて出来る限り逐語訳も付した。

文学、歴史、民俗・地誌、
三つの領域で構成

【文学】歌謡、琉歌、演劇、說話、日記・隨筆、琉球和文学、琉球漢文学(全27卷)。適宜、逐語訳を付す。

【歴史】琉球王府編纂の史書で構成(全4巻)。漢文史料には読み下しを付す。

【民俗・地誌】琉球王府および間切(沖縄の旧行政区画)・私的レベルで編集された「由来記」類(全4巻)。適宜、読み下しを付す。

最新の研究成果による、
細密な語注

重要語・難解語などには、これまでの研究成果を反映した細密な語注を頭注として付した。また、スペースの関係で頭注に収録できなかったものは、巻末に語注としてまとめて収録した。

うたわれてきた歌謡としての
リズムと音読を重視

特に『おもろさうし』では、歌謡本来としての形式を示すため、本文では省略されている反復句などを、逐語訳で、これがわかるよう表記した。また、初心者にもオモロの音読が可能になるよう現在のオモロ研究の段階で明らかになっている拗音・濁音などの語についてはこれを語注では拗音表記・濁音表記で示した。さらに琉球歌謡、琉歌や組踊については、琉球語による発音をそれぞれルビとして明記した。

原寸本文見本

第1巻『おもろさうし 上』より

「まぶりおはる」が元形音。まぶるの b 音と m 音。m 音から b 音への変化は他に「ばれ」群れがある。ニブイ（い）眼り、キブイ（煙）など琉球語各地方々々を支配・守護する按司。按司司中の按司司、國王を意味する。國王を意味する琉球古来の語といふべき。あぢおそい」とも書く。語注 対反 1 型。反復句 かみての まぶりよわる 部分省略。不完全記載。対句部は全部省略。記載第 2 4 節で、おれて あすびよわれはの記載省略。反復部は全部省略記載。A2B3

3 世でうてち 世添うセチ 世を支配・守護するのに力を發揮する靈刀。そう「は添う」に対応するが、意味的には支配・守護するの意。セチは靈刀みおせば 御おはせ 御奉れ。差しあげましたので尊敬の接頭語みに「おやす」「差し上げた」の已然形 おやせ、確定条件の接続助詞 ばのついた形。語注 みおやせ、用 1 千 1 千万。それは千年の形で、永遠をいう。千例は本例 重複オモロもと 168 の千万のもちよるの 3 例。それぞれ添うて添うて、そはるは本来付き随う、付着する意であるが、本例では世を支配・守護する意のようである。そはるの接続形。はへてととは別語。大みす 大君こそ。大君神こそ。タミみは 聞得大君神のこと。すは強意強調の係助詞で和語の「こと」にあたる。已然形である。語注 大みみ まづらめ 守らめ。守形で結ぶ。語注 大みみ まづらめ 守らめ。守形である。守護するであらう「めは推量の助動詞である。已然形になっている。対反 1 型 反復句 1 千万。世をわたちよわれ。記載法 不完全記載。対句

又とよむぜだかこが
又首里もりぐすく
又まだまもりぐすく

大意解説 聞得大君神による国王祝福のオモロ。聞得大君・名の鳴り轟く靈力高いお方様が、首里杜グスクに降りて神遊びをなさいましたので、
R

2 名の鳴り轟く靈力高いお方様が
降りて神遊びをなさいましたので、
R

3 首里杜グスクに
降りて神遊びをなさいましたので、
R

4 真玉杜グスクに
降りて神遊びをなさいましたので、
R

1 3 あおりやへがふし
一 きこゑ大ぎみぎや、
世そう、せぢ、みおやせば、
千万、世、そわて、ちよわれ

千萬の末までも世を支配してましませ R R

2 名の鳴り轟く靈力高いお方様が
世を支配する靈力を奉りましたので、
R

3 名高い國王様に
世を支配する靈力を奉りましたので、
R

4 名の鳴り轟く國王様に
世を支配する靈力を奉りましたので、
R

5 首里杜グスクで
世を支配する靈力を奉りましたので、
R

6 真玉杜グスクで
世を支配する靈力を奉りましたので、
R

7 大君神こそは守るであらう
世を支配する靈力を奉りましたので、
R

大意解説 聞得大君神による国王祝福のオモロ。聞得大君が主宰する祭祀で、国王へ

1 きこゑ大まきみ 聞得大神 君神 名 琉球国最高の
の君神。きこゑは、その名が君神に聞こえてゐるの
意。大まきみは「君神の中でも大きな存在であるこ
とを言う語。対語はとよむせだかこ」。語注 お
れで降れて降りて。おれるの接続形。16世紀の
金石文宗元寺下馬碑に「もあんにしけしもこ」
にてむまから おれるへし」とある。この「おれ
る」は、聞得大神が天上世界から人間界へ降臨し
ての意である。語注 あすびよれば遊び坐
むれば遊びなりましたので神遊びなさい
したので。語注 てにがした 天が。天下。オモ
ロ。ではまた天下とていう語は誕生していない。
「たいらげるの接続形。たいらげる」の使われる
語形は、これとたいらあけて(31)のみ。現代琉球
語などとの語形に対応するテラ・グンや、タイ
ラグなどとの語形は。巻1のオモロに固有の語
で、尚真王の事績と関つて、和語を借用したもの
か。ちやうど、来おれ。いらつてき
は来るの連用形。き、これに尊敬の補助動詞。お
はるの命令形。おはれの付いたき。おはれが元
の形。語注 とよむせだかこ 鳴響き精高す。そ
の名の鳴り轟く(聞得大神の対語として用いら
さる。大ききみ 開得大神の対語とモロでは
れる。語注 対反 I 型。反復句にてがした
たいらげてきよれ。語注 記説法 不完全記載。対反
句部は部分省略。記載第2、4節では全部省略記載
がよれば(その略記省略略。反復部は全部省略記載
A2 B3
2 かみでたの 神太陽の。神太陽の。神と太陽神が
「の」は格を表す格助詞。まぶるよる 守りお
よる。お守りなさる。まぶるの連用形。まぶ
り」に尊敬の補助動詞。おはるの連体形の付いた

一ー あおりやへかふし
一 きこゑ大ぎみぎや、
おれて、あすび、よわれば
てにがした、
たいらげて、ちよわれ
又とよむ せだかこが
又しよりもりぐすく
又 まだまもりぐすく (↓119)
大意・解説 聞得大君神による 国王祝福のオモロ。聞得大君神の中で謡われたオモロである。オモロの歌唱
グスクに降臨して行、国王祝福の祭祀の中で謡われたオモロである。オモロの歌唱
主体は聞得大君とみられる。「聞得大君神様・名の鳴り轟く霊力高い御神様が、神降り
して神遊びをなさいましたので、首里杜・真玉杜に神降りして神遊びをなさいました
ので、【国王様は天の下なるこの世界を平定してまします】という意。

一ー あおりやへかふし
一 きこゑ大ぎみぎや、
おれて、あすびよわれば、
かみてだの、
まぶり、よわる、あんじおそい

一 聞得大君神が
降りて神遊びをなさいましたので
天が下を
平らげてましますR
2 名の鳴り轟く霊力高いお方様が
「降りて神遊びをなさいましたので」R
3 首里杜グスクに
「降りて神遊びをなさいましたので」R
4 真玉杜グスクに
「降りて神遊びをなさいましたので」R
1 聞得大君神が
降りて神遊びをなさいましたので
神・太陽の
お守りなさる按司襲い様ですR

58

王国末期の芝居台本「琉狂言」(八重山)を初めて公刊

第16巻に、今回初公刊となる「琉狂言」(八重山)を収録。

各巻とも解説、月報付き

全巻、担当研究者による詳細な解説を付す。月報執筆者は県内県外4名で構成。